

5 成果と課題

この2年間取り組んだ『社会教育事業評価の在り方』の研究について、各町村からつぎのような成果や気づきがあったとの声が寄せられました。

管内の事業を同じ定規で測れるようになり、自分の町村での事業と比較・検討ができるようになった。

担当者が事業の展開、進行や課題など一連のふりかえりができる。
これを活用して次年度以降も同様に評価ができる。

得ようとする事業効果を数値化することで、事業の成果を客観的に判断することができるようになった。

事業の成果を客観的に振り返ることができ、次年度以降も継続する事業であれば、その反省材料となり、今後に生かすことができる。
事業成果の説明資料にすることができる。

これまで、事業の評価をまったくしていなかったが、評価を行うことにより、課題や問題点を浮き彫りにできることがわかった。

事業評価への抵抗感が薄れた。

対事業費用効果の参考になった。

評価を行うためには、計画段階から評価指標を設定する必要があることがわかった。

評価票を作成することによって、中期計画などの施策目標をしっかりとおさえることの重要性や、費用対効果の判断材料となり税金を使っているという意識がより強くなるなどの気づきがあった。

評価しようとするのが、次の計画づくりや目標設定にとって重要だと再認識できた。

個別事業にくわえ、より広く関連する複数の個別事業の評価をもとに、施策目標の評価をする必要があることに気がついた。

客観的な評価を行うためには、担当者以外の評価も必要だということに気がついた。

まとめ

より効率的効果的な社会教育事業実施への一助となることを目的とした本研究は、管内共通様式の評価票を作成し、管内の全市町村で評価に取り組んでもらえることを最終的な目標とした。

評価票の作成においては、評価シートはなるべく簡素化し、評価に取り組みやすいものになるよう心がけた。結果2年間で管内20市町村のうち18町村で評価に取り組むことができ、それによって多くの町村で評価についての重要性や必要性の再確認をすることができた。

また、事業効果を数値化することによって、より客観的に評価ができ、今まで曖昧だったものや担当者の自己満足的な評価が見直されることになった。

しかし、事業効果を数値化できなかった町村や、数値化しやすい事業を評価している町村がみられ、すべての事業で事業効果の数値化は今後の課題である。

さらには、今回は共通様式ということもあり、評価項目は最低限度のものだけにしたが、目標は各市町村によって異なるために市町村ごとの独自の評価シートを作成していく必要がある。

社会教育事業評価を行うということは、自分自身が企画した事業の課題や問題点などが浮き彫りになってしまうということであり、パンドラの箱を開けてしまうことだ、とは生涯学習センター主査（現/北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課主査）柴田氏のお言葉である。この、開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまったために、さまざまな災いが出てきて世界は厄災に見舞われることとなると古代ギリシャ神話にある。しかしこの話には続きがあって最後に箱の底にひとつだけ残った物がある。それは希望である。おかげで人間は希望だけは失わず生きていくこととなるという話であるが、この箱の底に残った希望こそが、社会教育にとっての評価ではないだろうか。

社会教育事業評価票の活用について、アンケートの結果は次のとおりです。

（回答10町村）

- (1) 共同で作成した評価票を活用して、提出された事業以外に評価をしましたか？
 した 2 しない 8
- (2) 今回の評価票以外に、あなたの市町村で独自の評価票をお使いですか？
 使っている 1 使っていない 9
- (3) 今回共同で作成した評価票を、今後活用しようと思いませんか？
 思う 9 思わない 1

6 研修講座の概要

(1) 平成18年度

- ・ 日 時 平成18年6月23日(金) 17名参加
- ・ 会 場 後志教育研修センター 倶知安町総合体育館
- ・ 内 容 講義「コミュニケーション力のブラッシュアップについて」
実技「レクを活用したコミュニケーショントレーニング」
「サービス向上のためのコミュニケーションについて」
- ・ 講 師 広 島 孝 氏 (後志教育局社会教育指導班主査)
丸 山 泰 秀 氏 (後志レクリエーション協会)
松 本 妙 子 氏 (後志レクリエーション協会)
渡 部 恒 久 氏 (後志教育研修センター所員)

(2) 平成19年度

- ・ 日 時 平成19年6月22日(金) 16名参加
- ・ 会 場 後志教育研修センター
- ・ 内 容 講 義 1「これからの生涯学習・社会教育の視点」
講 義 2「なぜ今、自然体験なの?—その意義と活動実践—」
～ぶなの森自然学校をとおした家庭・地域・学校の関わり～
実 技 3「人と人との交流を深めるレク財」
—道具のいない遊び体験—
- ・ 講 師 柴 田 真 琴 氏 (後志教育局社会教育指導班主査)
高 木 晴 光 氏 (NPO 法人 ねおす 代表)
池 田 雅 博 氏 (後志教育研修センター所員)



平成19年度「人と人との交流を深めるレク財」の一角

7 後志教育研修センター社会教育研究委員会名簿

① 所員（調査研究部）

委員長 濱上 俊治（岩内町教育委員会）
委員 小原 和之（古平町教育委員会）
委員 渡部 恒久（寿都町教育委員会）
委員 池田 雅博（留寿都村教育委員会）

② 協力員

協力員 柴田 真琴（後志教育局 社会教育指導班）

③ 協同研究員

（北ブロック）

上杉 修市（小樽市教育委員会）
永井 克憲（余市町教育委員会）
乾 芳宏（ " ）
鈴木 昌裕（仁木町教育委員会）
嶋井 康夫（ " ）

（岩宇ブロック）

大島 恭介（共和町教育委員会）
河村 勝（泊村教育委員会）
金内 聰侍（神恵内村教育委員会）

（山麓ブロック）

今川 誠悦（喜茂別町教育委員会）
小野寺 健（京極町教育委員会）
矢吹 俊男（倶知安町教育委員会）
渡辺 美月（真狩村教育委員会）
北本 靖夫（ " ）
藤本 篤（ " ）

（南ブロック）

熊谷 信宏（蘭越町教育委員会）
工藤 伸也（ " ）
鎌田 みどり（寿都町教育委員会）
今田 奈々子（黒松内町教育委員会）